

ハイスクールD×D 混沌 の渡り鴉

魔人邸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は投稿主の自己満足で書いています。
そこはお忘れなく

ある日、一人の青年がいた・・・

混沌・無秩序 この世で、カオスと呼ばれる物がそいつの周りで渦巻いている。
その名は霧崎きりさき蓮れん 高校2年生だ

どこに行くにも度々事件や問題が起こり、いつも苦労している。

色々な事が度重なり、引越しなどせざるを得ない状況に置かれ

その都度その都度、学校の転校を繰り返していた。

そいつは、自分の運命を呪つた。何故、自分はこんなにも不幸なのだと
静寂を求めて、暗い外を、

漆黒の鴉のようにそいつは静かな夜を歩く。静かに

そんな彼に、付けられた異名

混沌カオス
の渡り鴉レイヴン

である。

行くとこ行くとこに問題が起き、争い事が絶えない

蓮は、問題を起こしてはその場を離れ

まるで渡鳥のように各地を転々とする。静かに暮らせる場所を探して。

こんな世界に生きている意味なんて……

そんな彼に安息の地はあるのか？

だが、そんな彼はここ駒王学園に転入ってきて
大きく人生が変わる。

美人で可愛い先輩と後輩

変態＆馬鹿な奴らイケメンと僕は、知りあう。

最悪な出会い方で・・・・段々と巻き込まれていく

激しい戦いの中に…

彼、霧崎蓮は、まだ知らないであろう…
自分の体の中に住まう異形な力ことも。

目

次

プロローグ

旧校舎のデイアボロスと混沌の転入生

天使と解放される力

近づく体の異変

24 14

1

プロローグ

朝、ベッドで、僕は目を覚ました。

目覚まし時計を見ると、起きるには十分すぎる時間
「こりやあ、ギリもうひと眠りで起きるぞ」

まあ、そんなことしたら初日から遅刻確定なので

僕は、二度寝はあきらめた。

僕の名は、霧崎蓮、今日から駒王学園に通うことになつている。

もうかれこれ、10回くらい越して。今は一人暮らしだ。

まあ、親の仕事の都合だつたりつて言うのを理由にしたいんだけど
問題はこの僕にある。

昔から不幸な体質で

小・中学生の時、僕の友達、関わった人達、全員が必ず怪我をするんだ。

そして、身内、周りの人が死んだりとかさ・・・

一番ひどかったのはここ、駒王町で小さい頃少し住んでて、女の子と遊んでたんだけ

ど

僕の不幸のせいで、その子の母親が亡くなつちやつたことが一番僕はその子に謝りたい
い・・・心残りだから

それが原因で、虐められたり、大人たちに死に追いやられたりもした。
青信号で渡ろうとしたときトラックが突っ込んできたりとか
まあ、色々あつて、よく生きてたなつて話

ん？君の親はつて？いないよ・・・

中学の時、車両事故で亡くなつたんだ。

実は、死んだ親とは、血が繋がつてないらしんだ。

拾つたんだつてさ・・・

ちよつとショックだつたなあ、そんなこと告白されたときは
でも僕は、「たとえ、血がつながつてなくともここまで育ててくれたのはあんたたち
だ」つてね

涙目になりながら、ああ！お前は私たちの息子だと。
義理の父さん、母さんはそう言つてくれた。

それが最後だつた・・・

車両事故が起きて、二人はもう二度と戻つてこなかつたのさ、

葬式の時。

引き取り先の話題が持ち上がり、

周りはいやよ、いやよの繰り返し親戚たちが僕を、いや、俺を。。。邪険に扱う。そりやそうだ。

周りで人が死にまくつてる。

不幸な俺を、だれが預かるかつてなんだって話だ。

「うるせえなあ、なら生きてやるよ。死に物狂いで、

てめえらみてえな奴らにすがらねえ……一人で生きてやる!!」

俺は、世の中に絶望したよ。

なんで俺だけ、こんな苦しい思いをしなくちゃいけねえんだってな
俺は荒れていた。夜の街を歩き、静寂を求めて
安らぎを求めて…

だがそんなとこは無い、争いが必ずあつた。当時中学生だつたな
まあ、街は人で賑わつてゐからな

そこらのヤンキーに喧嘩を吹つ掛けられ、相手をしていた。
で、なーんか知らないうちに、俺につけられた通り名が混沌カオス^{レイヴン}の渡り鳥つてわけ
まあ、今までの人生もめちやくちやだし喧嘩もむちやくちやな行為してゐし

混沌はあつてるつちや、あつてる。

カラス

渡鳥つていうのはまあわからんが、カツコ悪いから鳥の文字は鴉カラスにしてる。漆黒つて良くね？鴉そんな色してるじやん？黒だし。

んで、2年後くらいなんだが、人気のない場所歩いてたらよ。

なんかいきなりだ後ろから声が聞こえてきた訳、「ほお？君、面白い力を持つてるね」

と

後ろ振り向くのよ、「誰だつてなるじやん？」

赤い髪をしたお兄さんだつたのよ。

「ツ！、あんた誰？」

俺が気配に気づかなかつただと??

こいつかなりの実力者だな。

「私かい？私はサーゼクス、君たちで言うとこの悪魔だ。」

「はあ？悪魔か？」こいつ頭、大丈夫かつて一瞬疑つたよ

だが、違かつた。サーゼクスは強かつた。なんか危ない気が漂つたんでないや、呼ぶならサーゼクスさんだね（汗）

いきなり興味本位で殴りかかつた俺もばかな行為をしたと思つてるよ・・・
軽くあしらわれたぜ・・・悔しいなあ。

「あんた、強いな。ハア、ハア、ハア」

「普通の人間にしては君も強い方だよ、

で？なぜ、こんなことをしているんだい？」

「いや、ただ生きてる実感がほしくて、こういうことしかできないんです今の俺には…

ただ、楽しく、静かに暮らしたいだけなんですよ……」

俺は、大の字に倒れながらつぶやいていた。

星がきれいだ。なーんてみていると。

悪魔さん、サー・ゼクスさんは顎に手を当て

う一むと、悩み…

いきなりこんなことを言い出した。

「良かつたら、君の今までの経緯、話してくれないかね？」

「え？」

相談くらいには乗れるよ？とおっしゃってくださった。

だから俺は、信用してみようと思いつこの人に喋つたのだ。

俺の今までの経緯を…

「そうか、君も大変だったのだな。」

「ハイ」俺は、うなずいた。

何か、いい案が浮かんだのかサーゼクスさんは口を開いた

「よし、わかつた、君、よかつたら我がグレモリー家が所有している。

駒王学園に入学しに来ないかい？」

グレモリー？ つて、サーゼクスさんの一家かな？
んな、事はいいや。

え、高校つて、マジか。

この人なんで、ここまでしてくれるんだ？

こんな初対面の俺に、でも、頭馬鹿だし

どうしようか、行つてみてえけどさ。心配だぜ

それと、また、周りが俺と関わり合いを持つとなると・・・

顔に出ていたのか、サーゼクスさんが

「心配してるね？ 君が周りにも影響を出す。不幸の力を・・・」

俺は、「はい・・・」と領きながら言うしかなかつた：

大丈夫、私に任せたまえ原因は調べる。

なんて事、言われちまつたけど大丈夫かな？

サーゼクスさん、結構忙しい人らしんだけど

俺に、学園に通わないかとか？、色々してくれたり

あそこ、公園なんかで、何しにやつてたんだ？会つたのが不思議なくらいだ。てか、あの時来た。いきなり現れた。メイドさんすつげえ美人だつたなあ……魔法陣的なものが現れ「な、なんだあ?!」と俺は驚いたら女性が出てきた。

「サー・ゼクス様、ここにいらっしゃつたんですね……

全くあなたというお方は……」

「おお、グレイフィアすまんな」

今どうやつて現れたんだ！？すつげえ興味あるんすけど！

それよか、つてこのメイドさんグレイフィアさんつていうのか
美人だなあ……

「おつと、そうだグレイフィア、一つ頼まれてくれないか？」

「なんでしょ？？」と首を傾げグレイフィアさんが言う

「この物を我が駒王学園に入学させたいと思う。

手はずを整えてくれまいか？」

え？？？といふ反応を見せるグレイフィアさん

「ですがこの物は……」

分かつて いるみたいな仕草を見せる。

サー ゼクスさん、どう したん だろ う・・・
こつちみて、俺に なん かあるのかな?

「では、今更だが早速、名を 教えて もらえぬか? 青年」

「え、お、俺、いや、僕の名は 霧崎、

霧崎 蓮です!!」

「よし、レン君とやら、君を駒王学園に入学させよう
まず、ここ駒王町に来てくれ、私はそこでまとう。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とい うこと があつて、今は、グレモリーハ 家が 管理して いる
アパートを 紹介してもら い。

学園を 通う、手 続きを してもら い。

こうして 学校に 行く 準備も して いるつて わけ よ。

サー ゼクスさん の一家 つて、すげえ 金持 ちなん だな・・・

なん と い う 巡り 合わせ、マジ 神様 あり がとう。

話が長い？ 悪かつたな。 つたく
さて、駒王学園に行きますか！

確か元々女子高で男子との共学になつたんだよな？

んな、こと考えてないでさつさと行かねえとマジで遅刻する。

家の鍵占めてと、よつしや！ 行こうぜ俺の学び場！

あ、やべ、一人称戻さなきや僕僕僕僕

よしつ！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ぜえぜえ、はあ／＼／＼」

と、すごい溜息を吐く

つ、疲れた……

不幸発動、ババアを担ぐ

猫を木の上から助け出す。

その他諸々、以下省略!!!

とりあえず疲れた……

で、ここが駒王学園なわけね

おーおーおー可愛い女子がいっぱいだな

まあ、そんなのは後で、職員室向かわなきや。

俺が通うことのなかつた。じやなかつた、僕の通う学園：これもサーゼクスさんのおかげだ。いづれお礼、しなくちやだな正門くぐり少し歩いたら。これは・・・

「バカでかいグラウンドだなこりやあ

スケールが違うすぎるぜ・・・」

とか呟いていると、俺たちは何のためにここに入学したんだ——————とかいう大きな声が聞こえてくる。

「ハーレムを俺は作る！」

女子はやだあ、きもーいとか言つてる人もいた。

「この学園にも馬鹿はあるんだなあ。僕もだけど……」

フツ、と、苦笑いを一つ

僕は、校内に足を運ぶ

で、職員室についたわけだが・・・

どうするよ？まあ、担任呼ぶか。

「すいませーん、今日、転入することになつた。

霧崎 蓮といいますがー?」

「う、待つてたぞ。と一言、先生がやつてきた。

「君が、霧崎だな?」ハイ、と一言返し

じや、ついてきなさいクラスに案内する。というので

後ろについて歩いた。

ちよつとドキドキするぞ・・・そんなの柄でもないのに

「ここが、2年の君のクラスだ。まあ、担任も私だがな」

まあ、ホームルームをするのでそのあとに入つてきなさい

僕は、うなずいた。

よーしお前ら!席につけホームルーム始めるぞーの声聞こえた。

の前に、今日は転入生が来てるぞー

で、「おおおおおおおおおおおおおお!!!」

つとでかい声が、はしゃぎす音だお前ら。。。

男共は、女の子ですか?女の子ですか?と

はしゃぎ出し、先生が答えた、残念だったなお前ら男だ、と。。。

男子共はなんだよ男かよとぶつくさ文句言つてゐる。

悪かつたな、女じやなくて・・・

入ってきなさいと言わされたので深呼吸をして
ドアを開けた。

黒板前に立ち、僕は、自分で、名前を黒板にチョークで書いた。

霧崎 蓮と…

「どうも、紹介に上がった。

霧崎 蓮ですよろしくお願ひします。」

そして一礼、パチパチパチと聞こえ

僕は、一言述べた。

「さつき、なんだ男かよつて、ぼやいた奴らあく

覚えとけよこの野郎？」とドスをきかせた一言を小声で……

と一言、思つてたことが口に出ちまつてたみたいだ

やべえ登校初日からやつちまつた…

僕は後悔した。。。

ほらあ、聞こえた奴らいたみたいで、怖がつてんじやねえかよお・・・
あたりめえだよなー・・・ハアと、心でため息を一つ

ま、まあいい。席は、と先生が言う。

あそこ、兵藤の隣が開いてるからあそこ座りなさいと

兵藤？あ、あいつ今朝、3人組とハーレム作るとか言つてたやつか・・・
俺は席に座った。

周りはビクビクしてんな、やりすらい。。。非常に

「兵藤君って言つたか？」

「お、おう！」

返事するのに、そんなびっくりするなよ。。。

「隣の席どうし仲良くしようぜ。」

僕、霧崎 蓮よろしく。」

僕は、右手を差し出し。

「俺は、ひょうどう兵藤いっせい一誠いつせいこちらこそ・・・よろしく

みんなは俺のことイツセーと呼ぶぜ？」

「んじや、一誠君で」

二人は握手を交わした。

これが、俺たちの僕たちの出会いだ。

旧校舎のデイアボロスと混沌の転入生 天使と解放される力

今日も、ジリジリと鳴り響く目覚ましに起こされる。。

「あゝ、めんどくさい朝がやつてきた・・・

学校行きたくねえなあゝ」

「ふあゝ」とでかいあくびが出てしまい。

今日、学園休むか、いつも思つてしまふ僕である。

起き上がり、洗面台へ向かい、髪をかきむしりながら
歯を磨き、いつもの日常。。。

準備をするため、制服着替えようとするがやつぱりめんどくさいが先に来る。

僕は、ベッドに倒れこむ、・・・ボフツ

「あーやつば今日はいいや・・・

学園に連絡と、あ、一誠君にもメールしとくか」

携帯を取り出し、一誠君、今日、体調悪いから休むよと一言
送信!、ピッ、

さて後は学園だな。

電話してと、「こちら駒王学園です。」という声が聞こえた。

「あ、もしもし、おはようございます。

駒王学園2年の霧崎ですけど。．．．今日体調悪いので休みます。」

「大丈夫ですか？」と言われたけど

まあ、一日安静にしとけば大丈夫だと思いますんでと答えといった。

そうですか、では、お大事に

ふう、いやあ、これだからずる休みはやめられない

あ、サービスさんすいません・・・・・

申し訳ねえならやるなつていう話だよな僕も。

ブーブーと携帯が鳴る。

お、一誠君からだ、なになに？

「お、大丈夫か？気をつけるよ？転校してきて即、体調崩すなんて。

霧崎お前も案外病弱なんだな？まあ、いいや。お大事に。

あ、あと聞いてくれ、なんと！俺に彼女が・・・・

ピツ、長くなりそうだから僕は、携帯を即切った。

一誠君の残りの文面はどうでもいいよ。

しかも、病弱じやないんだなあこれが、今まで休んできた理由全部ずる休みだぜ！熱とかあんまし出たことないや、それが自慢できること！考えてて悲しいからやめとこう・・・

「さて、時間もできたし！・・・・・ 張り切つて！暇つぶしと行きたいところだが・・・・・・寝よ。」

お休みぐう

あーベッドで寝転がってる時が一番、幸せ

そして、夕刻

ぼくは、目が覚めた。

「ん？もうこんな時間か・・・・・起きるか」

身を起こして、いつもの準備をする。

白の長Tシャツ 黒のパーカー ドクロと十字架のネットクレスをつけ、

黒のジーンズを穿いて、出かける準備完了

「さて！、夜の散歩と行きますか！」

俺今日休んだけどな？？？（汗）

これだけはやめられないさ。

今日も暗くなつた町を歩く。。。

僕は、とある噴水広場にきている。

同じことを二度いう、大事なことだから

今日学園休んだのにな、外に出てる。

でも、夜の徘徊これだけは止められない

人気のないとこをさまよう、数少ない、僕の趣味だ。

暗くなつた、夜の道を歩いていると声が聞こえてきたので
近くにある茂みに身を潜めた。

なんで、隠れる必要があるんだろうと 今更。。。

様子を見ていると

男女二人組みが何かしゃべつていて

男女二人組みが何かしゃべつていて

いきなり「死んでくれないかな?」と物騒なことを女は呟き
夢でも見ているのだろうか???

黒い翼を生やし、女の人が光の槍を投げた。

投げた方向をよく見たらそれは、

僕の友達、ひょうどう 兵藤いっぽ 一誠君が、槍で体を貫かれていた。

これは何かの冗談か?

僕は、「一誠君!」と大声を上げ、その場を飛び出した。

「一誠君!・ねえっ!・大丈夫つ?!

僕は彼の体を起こし声をかけた。

自分の手を見てみると、彼の血がついていた。

夢ではないこれは現実だつた・・・

一誠君の体を見てみると

槍が刺さっており、血が大量に出てている。

だが、槍はすぐに消え去つた。

は、早く助けを呼ばないと!

「よ、よう・ 霧崎 ・ なんでお前が、こんなところにいんだよ・・・」

「そんなことはいいよ！僕のことは後回しだ！今、救急車呼ぶから！」

僕は携帯を取り出し

急いで救急車を呼ぼうと電話しようとしたその時！

「無駄よ…」

黒い翼を生やした女がこちらに向かって呟いた。

「何だつて!?」

そのの方を向き言つた。

僕は思つた。この人の背中に翼があるけど

天使か何かか？だが、本当に天使なのか？翼が黒い。。

でも、なんで天使が一誠君を狙う？

この人と一誠君との間には何かあるというのか？

「どのみちその子は助からないわ」

なんだと、お前が、一誠君を！一誠君を傷つけたのに！

僕は、いや、俺は久々にキレた。

「てめえ！俺の！俺の！ダチをよくも！

こいつは初めてできた俺の友達だつたんだ！それをお前は！」

「ゴメンね。その子が私たちにとつて危険因子だつたから、早めに始末させてもらつた

わ。

恨むならその子の身に宿る神 器を宿させた神を恨んでちょうどだいね

セイクリッド・ギア

神 器？なんだそれは

聞いたことがねえ、一体何なんだよそれ・・・

「ま、あなたには関係ないわ、見られたからには。あなたにも死んでもらうわ」

黒い翼の天使は光の槍を出し、俺に、襲い掛かろうとしてきた。

マジかよ・・・。高校二年生で死ぬのか？

まだ人生楽しんでねえよ！ 俺の周りは最悪なことしか起きてねえ！

彼女も作つてデートもしてない！

一誠達に出会つてまだどこも遊びに行けてねえ！

まだ死にたくねえ！！！

「やり残したことが、あるんだよ、俺にはああああああ!!!!」

周りが木々や地がざわつく、蓮の付近に黒い物体が漂う

「な、なんだこの気迫は！ こんな奴にこれほどの力が?!」

蓮の体から暗黒の禍々しいオーラが湧き出る。

頭の中に声がよぎる。「我を開放せよ・・・」と

なんだよこれ、さつきから聞こえる声は誰だ？

「混沌の力を……」

唱えよ、我が末裔よ……解放しろその力を
く、口が勝手に……

「混沌よ、すべてを無に帰す力、俺に貸してくれ……」

両手に力を籠め、そして、黒い物体が手に集まる。

な、なんだか知んねえが！これを投げろってか

とりあえず、あの女天使に投げてみますか！

作られた黒い球が女に向かつて、放たれる。

「このやろお!!!くらええええええええああああああああ!!!!!!」

蓮が放つた黒い球は黒い翼の女に向けて放たれ、

女は避けたみたいだが、少しカスつたみたいだ、右腕を押させていた。

「くっ！、油断したわね。少し要らぬダメージを受けてしまったわ。

この男にここまで之力があつただなんて！ここはいつたん退却ね」

女はそのまま空を飛んで距離を遠ざけた、

力が抜けたのか蓮は膝から崩れ落ち

地面に前のめりで倒れる。

やべえ、なんだこれ、いきなり脱力感が……

急に力が一気に抜けた感じだ。。

なんなんだこの感覚は手足も動かねえ

突然、俺は顔を上げ視界に誰かが映り込んだ

そして声をかけてくる。

「あなた達ね、私を呼んだのは」

達つて、俺は読んだ覚えねえよ

誰なんだこいつ？と俺は思つた。

そして俺は一誠を見る、まだ意識はあるらしい

よかつた。。。傷は良くはないがな

だが、俺は、だんだん目がぼやけてきたせいかわからなくなる。

「死にそうね。傷は・・・・へえ、面白いことになつてるじゃないの。 そう、

あなた達がねえ・・・・。本当、面白いわ」

クスクスと興味ありげに含み笑い

何がそんなに面白れえんだよ・・・・

俺たちが無様にやられてる姿がおもしろいんかねえ：

いいから助けるこの女とか頭んなかで考えるのも疲れた。。

「どうせ死ぬなら、私が拾つてあげるわ。 あなた達の命。 私のために生きなさい」

俺はまだ生きてるつづーの

一誠はあぶねえだろうがな。。。

やべえ意識が。。。

途絶える寸前、俺の目には鮮やかな赤い髪が映り込んだ。

あいつは、一体?。。。

近づく体の異変

今日も朝がやつてくる・・・
 だるい・・・行きたくない学園が・・・
 なんか変な夢見たな・・・最悪な夢だつたぜ
 体を起こして、いつもの支度へ

「はあ、めんどくせえ」と、そんな一言が出るのがもうお約束だ。
 洗面台で髪を搔きむしりながら準備

たまに、痒いからと言つて股間を搔きむしってることは内緒だ・・・
 なんか体がだるいな、それはいつものことで。

今日は、なんかそれ以上に、疲れてる感覚が・・・
 まあ、学園に行こう、制服に着替え、部屋を出るか。

「ふあ〜」と、欠伸が出るのもこれまた、お約束
 欠伸、ため息、だるいはもう、デフォだね
 「はあ〜」と大きなため息、言つたそばから・・・

まあ今更、幸運が逃げたところで意味ないしな、もともと不幸だし
言つて悲しくなつてくるぜ：

通学路、眩しい光を浴びながら

帰つて寝たいの一言しか頭になかつた・・・・
いつも以上に、やはり体だるいのである。

夜出歩いてるのがそろそろ響いてきてるのかね・・・・
でも夜の徘徊だけは外せないんだよなこれが
いままで、続けてきてたし大丈夫だろう

僕の一つの趣味だからさやめられないさ・・・
完全に夜型の人間なつていた。

でも、最近体力が落ちてきたような気がする。
そう、一気に減つた感じだ。

こんなことがあるのだろうか？

学園から帰つてきて、家に着いたら
制服のまま朝まで寝ているのだ

夜、外に徘徊しなくなつた。そんなことあるのか？

僕の唯一の楽しみが……

そう、日を増すごとに体から力が吸い取られている感じだ
僕の身に何が起きているのだろうか？
あの夢が関係してるのであるのか？

黒くて何者とも言えない入り混じつた物体、頭によぎつたあの声……
でも、所詮は夢は夢、一誠君が刺されてる夢など……

やはり、寝るのが多くなった起きるのも辛く
ちよつと、ふらついたりもするのもしばしば
まあ、それでも学園はいくんだけどね

自分のクラスに着き、席に座り
来た早々、机に突つ伏す僕

隣にはすでに、一誠君とその友達が既になんかやつていた。

「一誠君、おはよう」と挨拶

「お、霧崎、おつす。どうした元気ねえな？」
まあ、大丈夫だよと返事だけ返しておいた。

そんでもつて、友人馬鹿2人

松田と元浜、ハゲとメガネ猿である。

一誠君の悪友だ。

合わせて3馬鹿トリオ（変態達）である。

こいつも朝から何してんだよ・・・全く
机に卑猥物ばつか置いてあるのだ。

女子たちが、「死ね」とか「最低！」とかいう声が聞こえる
まあそうなるだろうな普通は。

松田は、「脳内で犯すぞ！」っていう始末
こいつマジ最低だ・・・

まあ、僕も興味ない訳じやないよ？だつて男だもん！

見たいよ！仲間に入りたいよ！でも・・・今はそんな気分じやねえ
そんな中、一人だけテンションが低かつた。

一誠君も元気がねえけどどうしたんだろう：
まあ僕は寝よう・・・つて思つたが

松田の声だ、「幻想の影響か？有痺ちやんだつけ」
有痺？だれだ？そいつ

ちよつと話を盗み聞きする作戦にでた・・・

「マジで覚えてねえのか?」

「だからさあ、俺らはそんな子紹介されてないって」

「そうだ、何度も言うがそんな子を紹介された覚えがない」

なんの話だろうか?

まあ、わからぬいからいいや・・・

おやすみさん、ぐう

そのあとも近くの3馬鹿は騒がしいほど盛り上がっていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一誠 side

「お前ら、マジで有麻ちゃん紹介したのにおぼえてないのかよ」

「知らないつたらしらねえっての、だいたいお前に彼女なんてできたら大騒ぎだ。俺ら

が裏切り者としてお前を殺してやるね」

物騒なこと言うなよ:お前らが言うとマジでシャレにならん

隣をチラツと見てみると

あれ、霧崎の野郎来た早々居眠りかよ:..

ま、こいつとは挨拶するだけだが仲良くやつてるつもりだ

知り合い程度だけどよ。

でも、一日中寝てるようであれば

帰り際に声だけでもかけてつてやるか

「よーしお前らー！今日は家に寄つていけ、お宝の鑑賞会と行こうではないか！」
しようがねえ、俺も、こんな暗くなつてちやダメだな

よし、松田と元浜と一緒に馬鹿騒ぎするか！

「よつしや！飲み物と菓子買つて！一緒に鑑賞会とでも行くか!!」

「お、ノリノリじやないかイツセー、それでこそ我が同士だ！」

そんな時、ふと外を見る。教室の窓から見える

通学している真紅の髪をした一人の女性・・・

わが校のアイドル、リアス・グレモリー先輩

この学園3年生だ。

「やつぱりいつ見ても綺麗だあ」呟くと

ウンウンと頷く、元浜と松田

俺以外の奴らも釘付けだ・・・

見ているだけで、俺にとつちや高嶺の花

ああ、あんな美人と付き合いてえなあ！

と思つた矢先

「つ！」

一瞬、視線がこつちに向いたような？

笑つてた気がする。

なんだこの感覚、今ものすごくぞつとしたんだが・・・

気のせいだよな、あの人と接点ないしな。

俺が見た夢でも、紅い髪をした女性を見たような・・・

思い出そうとして、もつかい外を見たが

姿はもうなかつた・・・

・・・・・・・・・・・・・・

時刻は放課後

元浜、松田が「イツセー帰ろうぜ！」と

「おう！」

と、その前に霧崎は？

まだ寝てやがるこいつ……

俺は、声をかけた。

「おい、霧崎、放課後だぞ？起きろよ帰らねえのか？」

寝言でこいは「お、おー、起きるわー」と言つときながらぐう、と寝息……これはもうだめだなほつとこう。

「お、おいイツセーやめとけよ霧崎に関わるの……」

「そうだぞ吾輩もおすすめはしない」

「なんでだ？」疑問におもつた。

ちよつと気になつたから聞いてみた。

「霧崎に何があるんだよ？松田」

「こいつに関わってるやつ全員なんかしらの不幸が起こつてんだつてよ。

俺なんて秘蔵のコレクションが紛失した。」

「吾輩なんてメガネが割れたぞ!!!」

そういえばあいつが転入してきた頃を思い出した、

みんなに質問攻めにあつていたのだ。

これはもう決まつた転入生とかのお約束事であつて……

霧崎が言つてた言葉があつたな「僕に関わると不幸になるよ：」

この言葉が引っ掛かつたんだよな俺

案の定教室出て行つちまうしな。そりやあ誰も寄り付かなくなるわな
ま、独りぼつちはかわいそうだし。

知り合い程度だが話はしてる。

いいやつだとは思うんだが‥‥

「おつと、そだ早く俺の家に行こう！時間が無くなつちまう
秘蔵コレクションを見ようぜ！！」

松田の一言に俺たち二人も「おーーーーー！」の掛け声

学園を出た。

一誠 side out

何時間寝ていたであろう？

周りを見てみる。

誰もいない・・・・・・暗いな。
ちよいと背伸び、目が覚めた。

教室の窓を見たら外は暗かつた。夜になつていたのだ。

「おい！、マジかよ！、なんで誰も起こさねえんだよおおおおお
僕は、誰もいない校舎で一人叫んでいた。

「つたく、一誠の野郎・・・起こしてくれたつていいじやねえかよ。」

あいつだけは友達と思つてたのにな
悲しいぜ。。

いや、までよ？これも考えられる

起こしたが、俺が起きなかつたっていうパターンも

まあ、ありそうだな

明日辺り聞いてみるか。

てか、思い出していると、松田たちが言つてたな

有痺ちゃんだけか？

誰なんだろうか、一誠君の彼女かな？

でも、あいつに彼女できたら大騒ぎだしな。

「あ、そういうや、学園休んだ日あいつにメール送ったな
返信来てるはずだが」

返信フォルダを見てみると、一誠君からやはり来ていた。

内容は「あ、あと聞いてくれ、なんと！俺に彼女ができました！」

昨日告白されて付き合うことになつたんだ！

お前にも紹介したかつたぜ、休みなんじやあ、仕方ないな！

今度、俺の有痺ちゃん紹介してやるぜ！じやあな！」

「…………周りの奴が忘れてて、僕もその夜の記憶がない

なぜだ、だが、なんで僕の携帯だけメールは残つてるんだ？」

じやあ、あの夢は嘘じやねえってか！僕が見たのは現実なのか？！

なんで、一誠君は生きてんだよ！死んだんじやねえのか！

「あ、」僕は思い出した。おぼろげだが赤い髪をした女のことを……

あいつは何者だ？

夢で見た場所……公園だ、あそこに行けば何かわかるはずだ
俺が力を使つたあの場所へ……一誠君が天使にやられていた場所へ行けば！
そうと決まれば早くいくぜ、その瞬間

「つぐ！」僕の体に激痛が走つた。。

んだよ、この感覚はよお！

スゲエ痛えし、吐き気がする。目が霞む

頭に声がよぎる

「目覚めよ……」

また、この声かよ！

「今は、お前の声を聞いてる。暇はねえんだよお！

引つ込んでろおおお!!!!」

はあ、はあ、はあ、息を上がらせ

ふう、呼吸を整える。僕の体は、ひどく汗でびっしょりだ。

「いこう、公園へ……」

僕は急いだ、また嫌な予感がする。